大東文化大学経済論集　86－1，2006.3

遡及法分析の歴史哲学的基礎

大河内　暁　男

第１節　歴史事象と「現在」の問題意識

経済史にせよ経営史にせよ、歴史研究で用いる遡及法とは、「現在」における私の抱える問題や課題について、その本質についての認識を得て、原因を解明し解を求めるために、なぜ当該問題が出現したのか、その過程を、当然のことながら「現在」から見れば過去の事物事象に一歩一歩遡って、分析し、叙述する手法である。遡及法という用語に馴染みのない研究者が昨今少なくないように見受けられるが、この手法は研究枠組みの造り方と叙述に難しさがあり、工夫を要するが、発想としては特段に新しいものではなく、さきに拙著『ロウルズ-ロイス研究』においても、この手法の意味に触れておいた[1)]。

なぜ過去の事物事象に「現在」の私が関心を持ち、分析しようとするのか、その行為を改めて問うならば、何気なく使っている言葉である「現在」とは何か、また「過去」とは何かについて、予め考えなければならない。現在とは、いま私が生きているその瞬間のことであり、より抽象概念として言えば、長さのない時間としての「いま」の瞬間である[2)]。現代というような曖昧な話ではない。それに対して過去は、現在の私にとって過ぎ去ってしまったもの、したがって生きていないものであり、自然時間的に新しいとか古いとかいう概念ではない。過去は一様に過ぎ去ったもの、死んだものである。

そこで現在の私が過去の事物事象に遡って研究するということは、死んだもの、現在にいないものを取り扱うわけだが、現在にいないものをなぜ取り扱えるのかと言えば、それは世に伝わるさまざまの史料、物語、叙述の存在を私が知識として知っているからであり、あるいは知識に基づいて探索した結果として、なんらか史料等を発見したからに他ならない。自然時間としては過去に作られたそうした史料や叙述は、現在の私が研究対象として気付き、取り上げなければ、私にとっては、それらが作られた過去のまま死せる存在である。現在私が取り上げることによって、それらは私によって過去の事物事象として認

識され、過去に存在した事物事象が自然的時間の隔たりを越えて現在に「過去の事物事象」として蘇ることになる。したがって、死んでしまった事物事象、史料、物語はすべて、現在の私が主体的に係わって取り上げるとき、はじめて「過去」として生命を与えられるわけである。

しばしば歴史に関心がある、史的分析に関心があるなどと言われるが、趣味として過ぎ去った事物事象、あるいは太古の昔に関心を寄せるというのならともかく、研究者として史的分析に関心があると言うことは、それ自体が実は空虚な発言である。一体何をなぜ取り上げようと言うのか。自分自身の現在を確かめ、問題を掲げて自覚することなしに、過ぎ去った事物事象に関心があるなどと言える筈があるまい。現在（現代ではない）の、生きている自分の問題、したがって自分にとっての「現在」の問題があってはじめて、その解決、謎解きの材料、手掛かりとして、過ぎ去った事物事象、歴史過程が、自分にとって意味あるものとして蘇って来るのである[3)]。クロォチェ（B. Croce）はこの点を次のように言う。過去の歴史の「存立の条件は史的叙述をうけて居る事件がその歴史家の精神の中で生命を呼吸して居るといふこと」[4)]である、と。

このような現在の私が抱える問題や疑問の解決、本質の認識、意味づけを、これまでに人間が行ってきたこと、事物事象との関係を手繰って、その解を求めようと思う心的行動こそ、自己を確立した研究者としての問題意識であり、その行動に行為者の主体性が貫かれていると言えよう。

現在の問題の解は、この現在に同時には求め得ないのであるから、現在の問題を生ぜしめた過去に遡って探究しなければならない。したがって歴史分析の基本的方法は、現在から過去への遡及に頼ることになる。私が歴史研究に当たって遡及法を用いるという場合、その遡及は私の現在からの遡及であって、私とは関係のない任意の起点、あるいは人が決めた起点からの遡及ではないことは、言うまでもない。現在の私の問題意識なくしては、そもそも私の研究にとっての過去の事物事象への遡及など、あろう筈がない。

第２節　二つの歴史分析叙述方法　―経時的流下法と遡及法―

１．現在と過去を橋渡しする二つの叙述方法

現在の私の問題意識が過ぎ去った死せる事物事象につながるのか否か。現在私には見え

ている問題について、その解が当の問題を経時的に造り出した源である過去の人間行動にあるとなれば、その過去と現在とはどこが異なるのか、現在の問題は過去のどこから、なぜ生じたのか、その差異と変化の経緯、仕組みを解明することによって、現在の問題の本質を認識し、解を得ることが出来よう。

この現在と過去の事物事象とを橋渡しして、現在の問題状況の本質的認識を得ることは、およそ歴史研究たるものの本領であるが、その分析叙述の方法として、これまで歴史学は大別して二つの方法と立場を、すなわち続いて述べるような経時的流下法と遡及法を、意識的に作り出して来た。しかし昨今の研究者においては、この意識的行動がややもすれば忘れられ、そうした方法論に無関心もしくは無知としか思われない場合さえある。単に昔の物事について、○○の基礎知識的な物知りであることに満足しているだけならいざ知らず、歴史研究を業とする者が、二つのいずれを取るかはともかく、基本的方法論を自覚しないということは、研究者として欠格事由に当たると言って過言ではあるまい。

さて、歴史分析と叙述の方法として、一つの方法は、先に述べたことだが、現在の事物事象に私の問題を発見し、その源泉を求めて過去の事物事象に遡り、問題形成の原因を突き止め、翻って現在の問題の解を求める、そこに歴史研究の意味、存在理由を主張するという遡及法である。

第二の方法は、論理学的に言えば第一の方法の「裏」となるものだが、現在の状況に問題がないから、過去から現在までやってきた行為は問題がなく、それでよいとして正当化しようとして、その行為を過去から現在まで経時的に、時の流れに沿って下りつつ叙述するというものである。遡及法に対して、経時的流下法と便宜上呼んでおく。この方法と立場は、言わば現在を正当化する歴史観に立つわけである。

以下これら歴史分析叙述の方法について、やや立ち入って検討したい。

2．遡及法

イギリス経済史研究上きわめて大きな影響を与えたトインビー（Arnold Toynbee）の講義録『英国産業革命史講義』[5]は、1881年から1882年にわたってトインビーがベリオル・カレッジで行った講義のノート等を集成したものだが、彼は「講義の主題は18世紀より19世紀初めにかけての工業および農業の大変革である」[6]と述べている。だが彼の狙うとこ

ろは、経済史的考察それ自体にあったのではない。彼にとっての「現在」である1870年代イギリス社会の現状、とくに労働者階級の状況とその将来展望に深い関心を懐いたトインビーは、主として歴史を研究しようと思う学生を相手に[7]、次のように訴えた。

「過去を研究するに当って、常に現在の諸問題を心に留め置き、人類にとっていつになっても重要なものごとについての幅広いものの見方を求めるという気構えを持って、過去に遡ることが出来れば、それは素晴らしいことだ。‥‥仲間を組む歴史家は、自分たち仲間の目的のために過去を研究しようとする。彼らは過去のなかに現在のいろいろな論争を読み取ろうとする。諸君は事実を事実自身のために追求すべきだが、それも諸君自身の現在の諸問題に対する生き生きとした感性を持って追求すべきなのである」[8]。

個別史料に埋没研究して[9]そこから歴史の個別具体性を強く主張するドイツ歴史学派的歴史研究が、ややもすれば歴史のための歴史研究に走ることに対して、トインビーは現在への関心を主張し、批判を加えているわけである。

トインビーは自分の現在の関心事についての解を、経済学の研究を通して求めようとした。そこでスミスに始まりマルサス、リカードと、それぞれ時代時代で経済の現状を合理的に説明しようとした経済学の理論は[10]、その時代の経済史的知識、つまり産業および社会状態についての知識に基づいて、その限りで解釈しなければならないということを確認した。これは当時までの経済理論の批判を意味した。

この批判に当ってトインビーは、まさに産業革命が始まろうとする1760年ころから1840年ころにかけてのイギリスを、人口、農業、製造業と商業、ヨーマン階級の没落、賃銀労働者の状態、と章を立てて論述し、中世以来の統制に代わって競争が経済活動の基本的仕組みとなったこと、製造業における工場制度の出現、ヨーマン階級の衰退と貧窮の急増という、この時期に起こった一連の社会的大変化を冷徹に観察した。そしてそれを「産業革命の主要な諸特徴」とし、そこに自分が抱える1870年代の問題の淵源を求めた。

遡及法を経営史の分野で個別具体的企業について試みたのが拙著『ロウルズ-ロイス研究』だが、これは現在の私にとっての問題であった同社倒産を、その直接の原因である資金不足を会計的分析を通して確認した後、そうした事態を引き起こした原因を求めて技術開発、経営政策に遡り、さらに第二次大戦期から戦後にかけてのイギリス政府の航空機開発政策、そして社内の人間関係にまで、根源を求めて途を辿ったものである。

3．経時的流下法

トインビーの『産業革命史講義』が現れる直前、1882年にイギリスではカニンガム（W. Cunningham）の大著*The Growth of English Industry and Commerce*が刊行され[11]、またやや遡って1847年にマカロック（J. R. McCulloch）の*A Descriptive and Statistical Account of The British Empire*第3版[12]が出版されている。後者は歴史研究書とは云い難いが、当時のイギリス大観として版を重ねた。編者マカロックは緒言で次のように述べている。「たとえ細やかなものにせよ、大英帝国の自然、資源、地勢的な力、人口、農業、社会制度について、はっきりと人に示して見せるような著作が近時絶えて現れないということは、驚きであり、遺憾なことである」（p. vii）。そこで、産業革命によって経済的に躍進しつつあるイギリスの現況を調べ、「どのような産業部門に関する説明についても、生産額、その部門の就業者数と賃銀といったようなものを記載するだけでは足りない。そうではなく、さらにその産業の歴史についても注意を払い、当該産業の発展を促進するなり妨げるなりしている目立った要因についても注意したものでなければ、十分ではないと考えている」（p. viii）と編集方針を説明している。この緒言はイギリスの現状に自信があるがゆえの言葉であろう。かくてイギリスの産業がどのようにして現状の隆盛に至ったかが、さまざまな角度要素から説明されることになる。

カニンガムの著作は、ドイツ歴史学派の影響を受けつつ経済活動の包括的歴史研究として最も早く登場したものだが、「生活の様々な分野に徐々に取入れられた貨幣経済と競争の進展がイギリス経済史の主題」（Vol. 1, p. viii）であり、「イギリスの産業史は他国の経済発展にとっても典型となる」（pp. 26–27）という考え方に基づいている。そしてそこに述べられる詳細な史実を積み重ねた大英帝国史は、1086年の*Domesday Book*以降、制度史を含めて経済社会の発展を、一貫して生物学的成長と捉え、近代に流れ下る。

このような歴史観はその後クラパム（J. H. Clapham）に引き継がれ[13]、歴史発展の連続性が強調されるとともに、経済史研究の主流となった。本稿との関連で言えば、クラパムはトインビー的手法に批判的であり、現在の問題意識から原因を求めて過去に遡るという発想には立っていない。

いずれにしても、経時的流下手法は、それが思考される環境が繁栄する大英帝国であ

り、歴史の輝く局面に分析叙述の光が当てられ、社会的経済的変化は社会の成長として数量的な物差で計量され、その論理によって合理化された。したがってそれは、現在は数量的絶対的には過去に比べてより良くなっており、進歩しているとして、現在を正当化する。この考え方に立つ限り、勝てば官軍史観に立った歴史叙述にならざるを得ないのである。

このように現在を正当化し、それゆえに過去に対する遡及的批判的分析を切り捨ててしまう考え方は、一見したところ、発想法として過去を批判して切り捨てる啓蒙主義に親近性があるように見える。しかしカニンガムにせよクラパムにせよ、歴史叙述に当って、歴史的事物事象の捨象を避け、個々の事物事象を丹念に探索し拾い上げるという考え方であり、イギリス古典派経済学に対するドイツ歴史学派の主張と重なるところがあることは間違いない。ただしこの個々の事物事象を、自ら正当化している現在の形成材料として組み込んで歴史叙述の体系を作り上げるわけで、この点で流下法は啓蒙主義ともドイツ歴史学派とも異なると言えよう。

4．トルストイ的歴史＜Mosaic＞論

遡及法にせよ流下法にせよ、現在の問題と過去の事物事象、そこに経時的に歴史的継受の関係を認め、現在の状況と過去の状況との密接な論理的関連性を重視する点は、共通している。現在を過去の人間行動の必然的結果として、過去を受けとめるという歴史観は、ヘーゲルの過去を批判的に継受する歴史主義と軌を一にすると言ってもよい。しかし個別の事象を重視するという思考を極端に推し進めると、上に述べた歴史過程の論理的関連性は、却って無視されることになる。その代表格はトルストイ（C. L. N. Tolstoy）の歴史論であろう。

歴史における人間行動の自由と必然の考察を基調として書かれた『戦争と平和』（1865－69）に鏤められているトルストイの歴史理論は、まず歴史研究の出発点となる史料そのものの信頼性に疑問を投げかけ、歴史事象の事実と歴史史料との隔たりを強調する。例えばクリミア戦争に従軍した経験に基づいて、彼は戦史という一つの歴史史料に疑問を呈し、戦場現場と軍上層部と戦史報告書との大きな差異を指摘し、戦場現場におけるさまざまな偶然が重なって戦局に大きな影響を与え、勝敗を決することを強調する[14)]。

以下まず煩をいとわずトルストイの語るところを引用しておきたい。1812年のナポレオ

ン進攻についてトルストイは次のように言う。「かかる異常な事件を捲き起したものは何であるか？‥‥歴史家諸公子は、オルデンブルヒ大公に加へられた侮辱とか、大陸封鎖の不遵守とか、ナポレオンの権勢欲とか‥‥が、この事件の原因であると、単純な自信をもって断言してゐる。‥‥吾々にとって、その原因は無数に考へられる。吾々がその探及に入れば入るほど、益々多くの原因が発見される。そして個々に取りあげられたどの原因も‥‥それ自身としては一様に正鵠なものに思はれる‥‥」[15]。

ほぼ同じことだが、彼は次のようにも言う。「種々な現象の原因を綜合的に把握する事は、人間の理知にとって不可能である。けれども原因を探求せんとする要求は、人間の心に先天的に備はってゐる。そこで人間の理知は、様々の現象が複雑な無数の条件下に置かれていることを悟らず、それ等の条件の一つ一つが原因のやうに思はれる結果、手あたり次第に一番わかり易い類似を掴まへて、見よ、これが原因であると言ふ」[16]。しかし「史学は進むに従って研究の対象として益々小さな単位を常に採りあげ、以て真理に近接しようと努力する。併し乍ら‥‥他から切離された単位を許容‥‥するのが、それ自身欺瞞なることを、吾々は痛感する」[17]。

歴史的発展の断絶を認めず、個別事象の捨象を認めないトルストイは、人類がこれまで繰り広げて来た「運動の法則を把握するのが歴史［学］の目的である」[18]としながらも、ナポレオン進攻というヨーロッパ史の一大事件を捉えて、「私は歴史的事件が現に起こりつつある時に、その原因など到底人智によって掴み得るものではないといふ、明白な事実に達した」[19]と告白している。

トルストイの歴史発展論は、抽象的に言えば次のようになる。すなわち、歴史を造り出す個々ばらばらな様々な要素因子の相互作用と協同の結果、ある一つの運動の方向が生まれ、史実を作り出すのであって、個々の要素因子の動きは主観的には自由なものである。そこで時に理性的には説明がつかないもの、無数の偶然のものがモザイク的に重なり合う。そしてその結果、避くべからざる運動が生まれてしまった[20]。この避けられない運動が時に歴史の法則と呼ばれ、時に摂理によるものと考えられた、眼には見えない、捉え難い歴史の流れの力だと言うのである。かくて、戦場でこの流れを観照する将軍クトゥーゾフと偶然の悪戯によって与えられた力を誤解し過信したナポレオンが、『戦争と平和』で対照的に描かれることになる。

歴史運動の法則を明らかにすることが歴史［学］の目的であるとしながら、トルストイは、窮極のところ、個人、民衆の自由意思に基づく種々の行動の偶然的積み重ねと合致に運動の原因を求めた。そして、個々の人間にどうすることも出来ない歴史の法則ないし摂理という、合理的には説明不能の原理に人類の運動の根本を帰結せしめたのであった。

第３節　歴史研究における実証の意味と限界

１．出発点としての歴史史料

歴史研究の出発点は歴史的な資料、文献にあり、すべての史的研究叙述は何よりも史料に基づいてなされる。その場合は、現在の私は過去の事象を体験出来るわけではないから、史料の探索によって、過去をいわゆる追体験する。これら史料に含まれている記録情報は、現在の私がある目的をもって探索し、閲読することによって、過ぎ去った事物事象として現在に蘇り、現在性を獲得して、持っている情報を私に語ることになる。けれどもこうした史料は、どのような処理をしてみても、過去の記録情報に過ぎないものであるから[21]、それ自身が現在誰に対して何を語るのかと問えば、自らは何ものをも語らない。過去の資料や記録が現在何かを語るとすれば、それは読み手である私の意識に対して語るのであり、私自身が抱える意識の問題に答えるのであって、それ以外のものではない。

ところで、歴史史料の探索と言う場合に、あらゆる資料を探索蒐集して、微に入り細にわたって事実把握、分析、実証を果たさなければ、歴史研究と言えないのであろうか。トルストイは『戦争と平和』を執筆するに当って膨大な資料蒐集に努めたことで知られており、事実彼は「私の小説に於いて、歴史的人物が話をしたり行動を起したりする場合は、決して私の創作でなく、この労作中殆ど一図書館を作ったほど蒐集した歴史的材料に據ったものである。私はそれ等の材料の表題を‥‥いつでも明示することが出来る」[22]と豪語している。

史料の蒐集は分析に先立つ歴史研究者の必須の仕事だが、史料を集め、分析と実証を進めれば進めるほど、史料を蒐集し尽くしてはいないのではないかと批判する、挙証不可能の証拠不確実という懐疑論ないし不可知論に遭遇する。それは膨大な史料集めに自信のあるトルストイも苦しんだ批判であった。しかし先にも述べたように、過去の事物事象の認識は現在の私の問題意識を出発点としており、私が自分の能力の限りを尽くして蒐集し認

識しない限り、そのほかの史料はたとえ眼前に示されていても、私の抱える問題意識と能力にとって意味のないものであり、それは私にとって現在化しないものである。再びクロォチェの言葉を引用しよう。彼は次のように言う。「我我はあらゆる瞬間に於て、それを知ることが意味をもつところのすべての歴史を知って居る、といはれねばならない。そしてその他のことについては、それが我我に意味をもたないが故に、我我はその認識の条件をもたない」[23]。

研究分析に必要と思われる史料を可能な限り蒐集出来たとして、次に研究者はそのなかから真に必要なものを類別し選択しなければならない。仮に無限の史料を蒐集し、かつそれの利用が可能であるとしても、私の能力は有限であり、私に利用出来る有意味の史料の量には限りがある。例えばイギリス議会庶民院の委員会報告書（いわゆる*Parliamentary Papers*）は、現在では我国でも原本全巻を閲読出来るし[24]、またボウルトン-ウォット商会の膨大な営業文書もマイクロ化され、設計図を含めて市販されている[25]。そうした点で半世紀以前と比べると現在の研究者は史料に恵まれているが、その反面、史料の洪水に頭を悩ませなければならない。

上述ボウルトン-ウォット商会文書一つを例にとって見ても、一人の研究者が実際にそれを読みこなして活用しようと思えば、その全てを読むことは恐らく先ず不可能であろうし、しかもそれだけで史料探索として完璧という保証はどこにもなく、同商会の全体像を掴むにはなお不十分である。そうであれば、無限の史料を集めて分析実証するということが、そもそも生身の有限な能力の研究者にとって、有限な現在の私の問題認識、分析、問題解決能力にとって、どれほど、どこまで、意味があるのか、そのことの検討自省が必要であろう。史料探索に基本的手順努力を尽くしている限り、歴史研究者にとって、史料蒐集に由来する懐疑論は、批判のための批判だと言わざるを得ない。

クロォチェは歴史研究上の史料に係わる懐疑論に対して、次のように述べている。「無限の審問がすべて満足されたと仮想して見よ。‥‥触れるに従って直ちにひろく広がって行くこの無限は何の用をなさないのみではなく、まことにそれは我我をして恐怖に戦慄させる。ただかの貧しき有限のみが我我に役立つ。思索を以てつかみ得べき確定的なるもの、具体的なるもの、我我の存在の根源をなしまた我我の行動の出発点をなす確定と具体のみが我我に役立つ」[26]。

「貧しき有限」とは、言うまでもなく、思索を尽くした上での人間の行動に係わる能力上の有限性が現実の史料蒐集の有限性を規定する、そうした有限を認めた貧しさであるが、この問題をサイモン（H. Simon）は、企業者としての人間の能力について「限られた範囲でのみ合理的で」、物事を「極大にする知力をもたないために、ある程度で満足する人間」という形で論じた[27]。

このような、サイモンの言う「合理性の限界」[28]、あるいは自らの限られた能力を自覚することは、企業者にもまして研究者にこそ求められねばなるまい。それは一方で無限への暴走の歯止めであり、他方で無限を前にした萎縮への歯止めである。

「限られた能力」というサイモンの考え方は、実はクロォチェが「貧しき有限」として30年以前に喝破していたものである。かくて史料選択に当って懐疑論的無限の観念から脱却出来るかどうかは、有限を以てよしと判断する現在の私の問題意識と研究蓄積の自覚如何、選択の主体性が確立しているか否かによるわけである。

2．遡及材料としての歴史史料とは何か

歴史研究の結論は歴史的出来事の経緯の叙述として表わされるが、それは探求分析した過去の事物事象についての研究者自身の知識、認識、意味づけを整序して叙述するものに他ならない。しかしそこに述べられることは、過去に起こった、また存在した事物事象そのものではなく、研究者たる私が主体的に捉え理解した限りでの過去の事物事象に過ぎないことは、あらためて言うまでもない。どれ程の誠実さをもって取り組んだ叙述にせよ、過去のある時点での人間の思考や行動そのものは、現在客観化し得ない。ただ私が確認した資料、文献、物語等を通して、過去の人間の思考、活動の存在が示される。

この過去の出来事、人間活動、存在それ自身は、整序された歴史記述の基礎になければならないものではあるが、しかしある一つの出来事を取りあげて考えてみても、現在の私が発掘し得る資料や文献が、その過去の出来事の全てを語るものとは考えられない。いやそれどころか、過去から現在化した史料等は、その事物事象が残した僅かな、あるいはその事物事象からすればほんの些細な、痕跡であるかも知れない。そのことに気付くと歴史家は、史料が失われたとか散逸してしまったと弁解する。しかし歴史研究者は、自分の立論に対して最少限の立証を求められ、それを欠くときは実証不能の立論となり、歴史研究

として欠格となる。したがって研究者は草の根を分けてでも史料を探索し、事物事象が残した痕跡を分析して、その背後にある事物事象自身を知ろうとすることになる。

さて、歴史家が扱う史料は、その背後に、実際に生活していた人々の活動、思考、そして出来事という事実が存在すると考えるべきであり、残されている史料がそのまま出来事の事実、つまりこの史料が歴史そのものなのではない。したがって、過去に存在した事物事象の事実、その活動の存在を僅かに留め伝える痕跡としての歴史史料、この史料に基づいて研究された歴史叙述、これら三者は、概念的に区別し認識しなければならない。

ところが史料がしばしば歴史事物事象そのものと取り違えられる。そしてこの史料を並べて整理し叙述することが、歴史研究＝歴史叙述であると思い込まれてしまう。三木清はこの点を次のように指摘する。「史料は、一方では或る意味に於て存在としての歴史の性質を担ひ、そして他方では或る意味に於てロゴスとしての歴史の性質を具へてゐるところから、或はそれが出来事そのものであるかのやうに、或るはそれの羅列が歴史叙述そのものであるかのやうに、見做されるといふことが起り得る」[29]。

三木の指摘は的を射ている。例えば経済史分野で詳細なマナ資料を整理し解説する、あるいは経営史分野で企業営業文書を丹念に紹介するといった研究が、近年とくに増加しており、それはそれで個々の資料記録として研究者に新しい材料を提供している。しかしそれは、記録の発掘公開として有益ではあるが、記録は記録であって、歴史研究の本来の目的である「現在」の私が抱えている問題意識に発して自分の主体性を込めた研究活動ではない。問題は、史料の背後に存在した事物事象、出来事そのものについての認識であり、そしてその分析ではないのか。

3．史料の背後にある歴史としての人間行為

人間の能力は有限であるから、仮に無限の史料が眼前に現れても、我々はそのなかから研究目的に適った史料を選択し、叙述しなければならない。その選択に当って、我々は、現在化した過去の史料のうちヴェーバーの言う「知るに値する」[30]と判断されるもの、あるいは第三者に伝えるに足る、伝えることが必要だと判断されるものに限って、分析対象として取りあげ、叙述することになろう[31]。

史料からは区別された、史料に痕跡として残されている歴史事実の背後に、さらに遡っ

て考察を進めれば、この背後にある事実は一体どのような人間の行為によって作り出されたのか、事実を担った人間の問題に行き着く。そこで、史料の背後にある事実すなわち歴史自体とは異なって、人間行為の有様を追い求めることにならざるを得まい。こうして突き詰めた人間行為の歴史は、三木清が「事実としての歴史」と呼んだもの[32]とほぼ近い。ただし哲学的概念操作をそのまま歴史研究にとっての分析道具とすることは、性急に過ぎるであろう。それは、三木の言う「事実としての歴史」が、歴史研究者の実際問題として考えるとき、実証が極めて困難な場合もあるからである。

一例を挙げよう。戦後日本の製鉄業は、周知のように、八幡製鉄を中心に急成長を遂げたが、それは朝鮮戦争という偶然も一因となって、大規模な設備投資によって実現された。それは第1次合理化期の広幅連続圧延機の輸入に始まる圧延部門近代化、川崎製鉄千葉製鉄所建設、次いで第2次合理化期のLD転炉の導入、新日本製鉄（戸畑、堺、［旧富士製鉄］名古屋）、住友金属（和歌山）、日本鋼管（水江）、神戸製鋼（灘浜）の建設と設備増強、そして第3次合理化から1970年の期間に世界最新鋭の大規模臨海製鉄所、すなわち新日本製鉄の君津、大分、日本鋼管の福山、川崎製鉄の水島、神戸製鋼の加古川、住友金属の鹿島が建設され、日本の製鉄業は世界で最も進んだ生産性と生産力を備えるに至った。

ではこの投資資金はどのように調達されたか。第一次合理化が始まる1950年から1970年までの20年間で、鉄鋼業界の設備投資額は合計4兆円を超えた[33]。これだけの金額は、債券市場が不十分な当時にあって、減価償却費、各種の補給金、認証手形等を別として、長期投資用借入金だけでは到底賄い切れない。ところが、営業報告書類や業界資料を頼りにする限り、長期投資用の資金がどのように調達され、企業内で運用されたのかは掴み切れない。貸手の金融機関側について見ると、製鉄業は「鉄は国家」の時代の基幹産業であり、貸付単位も大きいことから、融資先として安心感を懐いていたことは間違いないのだが、貸付先の内情は資料上は明らかにされない。

そこで次の方法としては、企業内の資金繰りや資金運用の帳簿等内部資料を探求することが考えられるが、もともと製造原価や資金運用のような資料を部外者が見ることは困難であり、仮に見られたとしても企業内で加工された資料に過ぎない。要するに研究者が通例考えている基本的資料をもってしては、産業金融の「事実」の実証的研究は、ほとんど

不可能に近い話なのである。

問題は、投資資金が何等かの方法で調達され、企業内で資金繰りされていた、その仕組みを探り出すことであろう。日本鉄鋼連盟『戦後鉄鋼史』は、昭和20年代後半から「長期資金的な性質のものと短期資金的なものと、混こうする傾向が現れてきた。短期借入金をもって設備資金的なものに流用」[34]したとしているが、その根拠は提示されていない。こうして文字化された資料に頼れないとなれば、唯一残る途は、資金調達と運用に係わった責任者なり、その実情を承知している経営者に、直接尋ねることであろう。八幡製鉄について言えば、藤井丙午、水野勳のほか、部外者ではあるが業界に詳しい花村仁八郎の諸氏から私が折々に聞いた資金の話は、綜合すると、長期資金の不足分を、大量の短期資金の借替えを継続して、それを事実上長期資金とした、というものであった。こうした昔話には資料がなく、実証困難だが、しかし上述『戦後鉄鋼史』の記述と符合する。

いやむしろ『戦後鉄鋼史』の記述は、当時の業界において行われていた資金調達と運営の実態を、資料を示さずに述べたものだと考えてよい。この業界人の語る事実を得て初めて、『戦後鉄鋼史』の記述が史料として信頼性を持つ。文字史料はないが、資金調達をした当の人々の行動そのものが歴史を示す。ここに「人間の行為」の歴史、あるいは三木清の言う「事実としての歴史」という概念が、歴史研究において持つ意味が示されるわけである。それと同時に、こうした概念は、史料万能の実証主義が歴史分析方法として完全なものではないことへの注意喚起でもある。

かくて、歴史研究者は史料に基づいた実証研究を求められるが、しかし史料の探索発掘によって物事が解明され、事が終わるのではない。その背後に「事実」が存在することを認識しなければ、歴史は解明も理解も出来まい。その「事実」とは自然現象以外は何等かの意味で人工物であるから、その事実を作り出した人間行為を明らかにしてこそ、「現在」の問題意識に端を発して過去に遡及する歴史叙述が完結する。

注

1）大河内暁男『ロウルズ-ロイス研究』東京大学出版会、2001年、2-3頁。

2）この考え方は数学上の概念、幅のない「線」、面積のない「点」と同様である。

3）George W. F. Hegelの次の言葉を翫味せよ。「世界史を概念的に理解する場合に、先ず第一に歴史を一つの過

去として取扱ふ。だが、我々は又同様に徹頭徹尾現在を取扱ふものである。真なるものは永遠に自体的且対自的に存在し、昨日存在してゐた者でもなく、明日存在するものでもなく、端的に現在存在してゐるもの、絶対的な存在といふ意味の「今」である」。ヘーゲル、河野正通訳『歴史哲学緒論』白揚社、昭和6年、270頁。

4）Benedetto Croce, *Zur Theorie und Geschichte der Historiographie*, Mohr, 1915,（羽仁五郎訳『歴史叙述の理論及び歴史』岩波書店、大正15年、6刷昭和15年、4頁）。クロォチェはさらに次のように述べる。「現在の生の関心のみこそが人を動かして過去の事実を知らうとさせることが出来る」。5頁.

5）Arnold Toynbee, *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, Longmans, Green, 1884, 9th impression 1927,（川喜多孝哉他訳『英国産業革命史』高山書院、昭和18年他）.

6）*Ibid.*, p. 1.

7）*Ibid.*, p. vi, C. M. Toynbee, 'Preparatory Note'.

8）*Ibid.*, p. 6.

9）個別の史実に埋没する歴史研究について、樺俊雄は次のように述べている。「歴史学が歴史より游離し超越する立場に立ってはその研究対象たる歴史の真の具体的把握に到達することが不可能なることは云ふまでもないが、歴史的実在そのもののうちに沈潜し内在することによってそれを究明せんとしたのは実に歴史学派に属する歴史家達であり‥‥しかしかかる歴史の内在主義的研究はその反面において歴史の流れより超越する側面を忘却し‥‥「歴史のための歴史」は「芸術のための芸術」と同様に誤りである」。樺俊雄『歴史哲学序説』理想社、昭和18年、39–40頁。

10）スミスの産業的自由放任、マルサスの人口法則と賃銀基金説、リカードの利子論と分配論、H. ジョージの経済進歩論などが批判的に取り上げられた。

11）Cambridge U. P. 初版1882年、第2版(1890年)以降1910－1912年第5版まで増補が続けられた。

12）2vols., Longmans, Green. 初版は1815年。

13）J. H. Clapham, *An Economic History of Modern Britain*, 3vols., Cambridge U.P., 1926.

14）トルストイ、原久一郎訳『戦争と平和』中央公論社、昭和21–22年、第X巻、301–302頁。以下トルストイからの引用はこの版本による。

15）同上、第Ⅵ巻、154–156頁。

16）同上、第Ⅸ巻、113頁。

17）同上、第Ⅷ巻、5頁。

18）同上、第Ⅷ巻、4頁。

19）同上、第X巻、「『戦争と平和』に就いて数語す」304頁。

20）この考え方は、熟した林檎が樹から落下する原因の譬で説明されている。同上、第V巻160頁。その他、第X巻125–131頁を見よ。

21）クロォチェは次のように言う。「如何なる努力と如何なる勤勉とをつくさうとも外的事物の上に歴史を築くことはもとより不可能である。新たに磨きをかけ、色々に区分けし、結束を改め、配列を変へても、記録は依然として記録でしかない。云ひかへれば空虚な叙述でしかない」。クロォチェ、前掲書、28頁。

22）トルストイ『戦争と平和』第X巻、304頁。

23）クロォチェ、前掲書、67頁。

24) 国際日本文化研究センター所蔵、その索引は*British Parliamentary Papers Indexes*文生書院版（CD-ROM）がある。

25) *Industrial Revolution : A Documentary History*, Series 1, Adam Matthew. これは編集されて手を加えられたものだが、この原史料を現地図書館で閲読紹介したものとして拙著『産業革命期経営史研究』岩波書店、1978年、265-274頁がある。

26) クロォチェ、前掲書、65頁。

27) Herbert A. Simon, *Administrative Behavior*, Macmillan, 1945, 2nd ed., 1957（松田武彦他訳『経営行動』ダイヤモンド社、第2版への序文、20-21頁）。

28) 同上、第5章。

29) 三木清『歴史哲学』岩波書店、昭和7年、4-5頁。三木の言う存在としての歴史とは、過去にそうした事象なり行為が存在したという事実を指し、ロゴスとしての歴史とは、史料等の知識に基づいて整序し叙述した歴史を指す。この哲学論にここでは立ち入らないが、上掲書、1-5、53-58頁を見よ。

30) Max Weber, 'Die "Objectivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntniss', *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen, 1922, S. 171.

31) 三木清、上掲書、11頁を見よ。

32) 同上、16-25頁。

33) 産業構造審議会資料および新日本製鉄調査部資料による。

34) 日本鉄鋼連盟『戦後鉄鋼史』昭和34年、870頁。